様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ２０８０３

研究課題名（和文）PICU入院児との面会がきょうだいに及ぼす影響：きょうだいへの適切な働きかけ

研究課題名（英文）Support for siblings visiting children hospitalized in the PICU

研究代表者
西名　諒平（Nishina, Ryohei）

慶應義塾大学・看護医療学部（信濃町）・助教

研究者番号：７０７７０５７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　PICU入院児ときょうだいの面会場面において，医療者がきょうだいと両親にどの様に関わり，その結果きょうだいにどの様な影響が生じているのかを明らかにすることを目的に，PICUできょうだいと関わる医療者へのインタビューと面会場面の観察を行った。
　15名の医療者（看護師9名，Child Life Specialist 5名，PICU専従保育士 1名）へのインタビューと，2事例6場面の面会場面の観察から収集したデータを分析したうえで，以前に収集した6事例9場面の観察データも再分析して統合した。その結果，【きょうだいの居場所をつくる】という概念を中心とした，14の概念からなる現象が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究結果から，医療者が，きょうだいだけでなく，両親の心情や両親の意向も推し量りながら【きょうだいの居場所をつくり】，きょうだいの言動に合わせて適切にきょうだいと両親に働きかけることで，PICUという特殊な場であっても，《きょうだいと患児を含めた家族に一体感》のある時間をもつことにつながることがわかった。
　子どもがPICUに入院するという家族にとって重大な出来事の中，きょうだいが家族の一員としてその出来事に参加できることは重要であり，本研究結果は，面会の場という限られた場面ではあるが，PICU入院児のきょうだいへのひとつの支援として，具体的な知見を提示し得るものであると考えている。

研究成果の概要（英文）：　Purpose: To identify the processes by whitch medical staffs can support siblings and parents visiting children hospitalized in the pediatric intensive care unit(PICU), and what kind of change occurred in the sibling's experience through the visits.
　Method: We performed semi-structured interview with 15 medical staffs(9 nurses and 5 child life specialists) and one childcare worker, and observed sibling's visitation 15 times. The interview and observation data were analyzed using a graounded theory approach.
　Results: We extracted a phenomenon consisting of 14 concepts centered on the concept of [creating a place for the siblings] .

研究分野：小児看護学

キーワード：小児集中治療室　きょうだい支援　家族支援　グラウンデッド・セオリー・アプローチ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

子どもの入院がそのきょうだいに及ぼす影響について，欧米では 70 年代から徐々に目が向けられるようになり，きょうだいにストレスや不安などの心理的影響を及ぼし，情緒や行動に様々な問題が生じていることが知られるようになった(Craft 他，1985；Morrison 他，1997)。我が国でも，80 年代後半から子どもの入院がきょうだいに及ぼす影響について関心が向けられ始め，欧米の先行研究と同様に，ストレスや不安，抑うつ，情緒や行動の変化などの影響を及ぼすことが示されている(太田 他，1993；新家 他，2007；小沢 他，2011；堂前 他，2011)。しかし，国内のきょうだいへの支援の状況をみると，両親が面会している間の一時預かりが中心で(石川 他，2012)，2013 年に全国の 655 か所の小児入院施設を対象とした調査では，35.5%の施設がきょうだいの面会を許可しておらず，52%が条件次第で許可しているという結果が報告されており(小林 他，2013)，きょうだいの面会が施設毎に，その都度必要性を判断しながらおこなわれていることがわかる。

きょうだいの面会が制限されている理由として，国内外に共通して，入院児が感染するリスクや，きょうだいがショックを受けたり，きょうだいの不安が増強するのではないかという，心理的影響に対する懸念が指摘されており，特に重症な子どもの治療をおこなう新生児集中治療室（NICU）や小児集中治療室（PICU）では，一般病棟以上に厳しく制限されている(Meyer 他，1996；Meert 他，2013；小林 他，2013)。しかし，感染のリスクについては，米国の NICU における調査で，きょうだいの面会によって新生児の感染徴候は増加しなかったことが報告されている(Wranesh，1982；Solheim，1988)。くわえて，きょうだいの心理面への影響についても，NICU で面会したきょうだいに不安や恐怖の増加がなかったことや(Schwab 他，1983)，面会を実施したきょうだいの方が，面会を実施しなかった群よりも状況を理解し，ネガティブな態度が減少したこと(Oehler 他，1990)などが報告されている。このような結果を踏まえ，米国では，1985 年に米国小児科学会が新生児領域におけるきょうだいの面会に関するガイドラインを示し，NICU での面会制限の緩和がおこなわれてきた。そして近年では，PICU においても，Family centered care への関心が高まるとともに，きょうだいの面会制限の緩和が進められている(Frazier 他，2010；Meert 他，2013)。

このように，PICU の近接領域である NICU において，きょうだいの面会がきょうだいに有害ではなく，むしろ有益である可能性が指摘されており，欧米では NICU や PICU において，実際に面会制限の緩和が進められている。しかし，いずれの先行研究も面会後のきょうだいの状況を調査したものであり，実際に面会の場で，両親や看護師がきょうだいにどのように関わり，どのようなことが起きているのかについては検討されておらず，また，PICU における研究は見当たらなかった。PICU という，重症な子どもが入室し，多くの医療者や医療機器に囲まれた特殊な環境おいて，ただきょうだいを面会させることがきょうだいにとって有益であるかは疑問であり，検討が必要であると考えた。

２．研究の目的

PICU に入院している子どもにきょうだいが面会する場面の観察と，両親および看護師へのインタビューをおこない，PICU 入院児ときょうだいの面会場面において，両親や看護師がきょうだいにどのように関わり，その結果きょうだいにどのような影響が生じているのかを明らかにする。

３．研究の方法

(1)研究デザイン：質的探索的研究

(2)研究参加者

①PICU 入院児と面会する 15 歳以下のきょうだい　②PICU 入院児

③PICU 入院児ときょうだいの両親　④PICU 入院児ときょうだいの面会に立ち会う看護師

※16 歳以上のきょうだいは成人同様に面会が認められている施設が多く，本研究の趣旨は原則的に面会が制限されている状況にあるきょうだいを対象とすることから除外した。

(3)研究参加の依頼方法

各施設の研究協力者が，対象候補者に研究の概要を説明し，許可する場合に連絡先を研究代表者に直接返信するための葉書を渡す。葉書が返送された場合に，研究代表者が連絡をとり，研究の趣旨，方法などについて説明をおこなう。

(4)データ収集

①参加観察法

・PICU 入院児とそのきょうだいが面会する場面に立ち会い，きょうだいと PICU 入院児，面会の場に立ち会う両親，看護師のやりとりを観察する。

②インタビュー

a.両親

・きょうだいの面会時の両親の思い，きょうだいへの関わりの意図，面会前後のきょうだいの

様子をどのように捉えているかについて話してもらう。

b.看護師

・面会時のきょうだいや両親の様子をどのように捉えていたか，きょうだいや両親への関わりの意図，きょうだいが PICU で面会することをどのように捉えているのかについて話してもらう。

(5)データ分析

PICU という場できょうだいが面会することで，どのような相互作用が生じているのかについての先行研究がおこなわれていないため，現象の構造とプロセスを把握するために GTA を用いて分析する。

４．研究成果

本助成金の承認後，データ収集と並行して，承認以前にすでに収集していた 6 事例，9 場面の観察データと 6 名の両親へのインタビューデータの分析をまとめ，論文として投稿した。これらのデータを分析した結果，【きょうだいを主役にする】という概念を中心とした，12 の概念から成る現象を抽出し，PICU という特殊な環境において，面会するきょうだいには緊張したり，周囲の環境を気にする様子が見られたが，両親と看護師による【きょうだいを主役にする】という関わりを中心とした，一連の働きかけが適切におこなわれることで，きょうだいに，患児に対する関心が高まる，患児を思いやる言動が増える，患児の状況に理解を示すといった変化が生じることがわかった（図１）。同時に，きょうだいにそのような変化が生じるためには，一連の働きかけにいかに両親が参加しているかが重要であることも明らかとなった（西名 他，2017）。

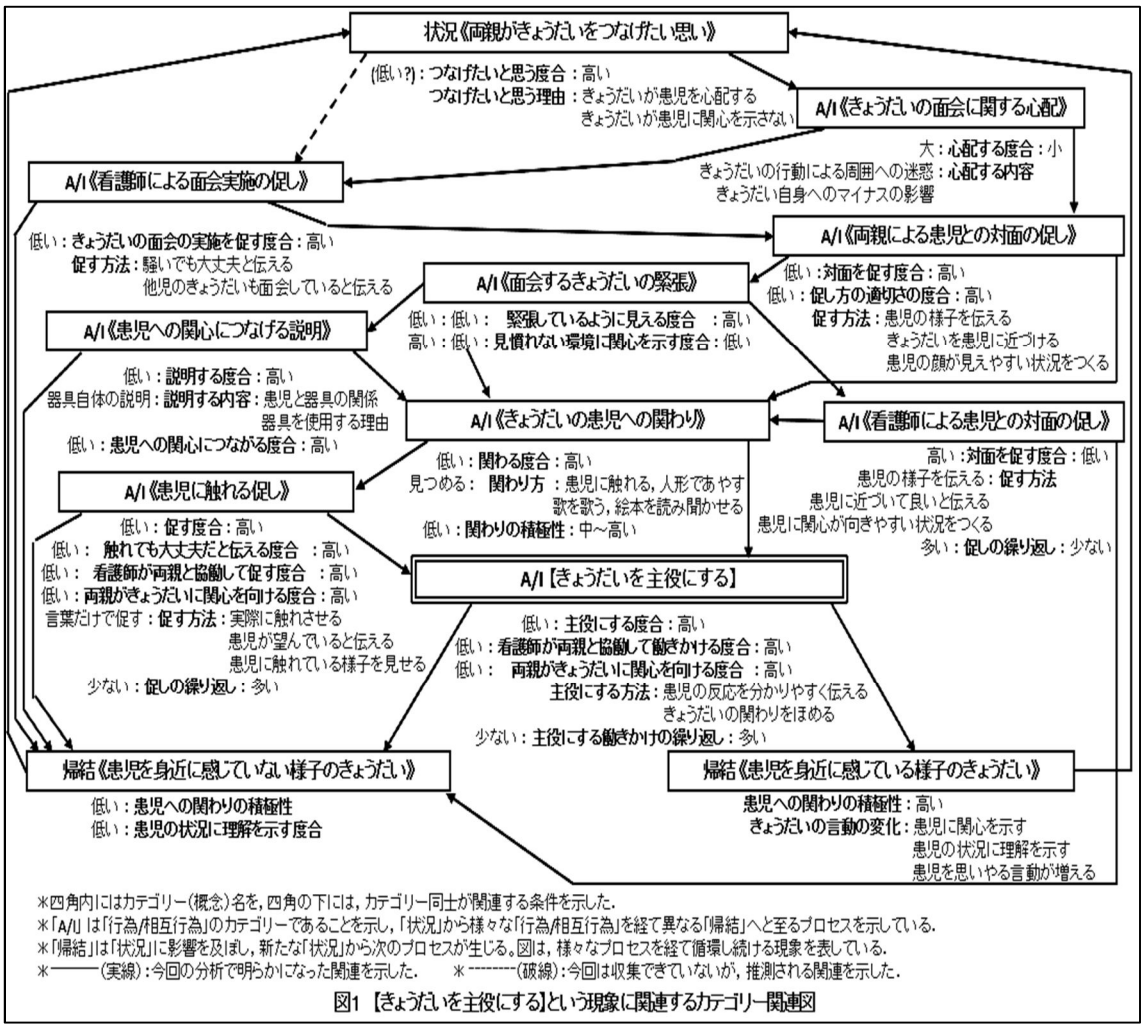

図1 【きょうだいを主役にする】という現象に関連するカテゴリー関連図

しかし，先行研究で，PICU 入院児の両親には不安や抑うつ，PTSD といった心理的問題が生じることが示されているように（Ress 他，2004；Colvile 他，2012），PICU に子どもが入院した両親は心理的に余裕がない状況にあることも多い。したがって，PICU 入院児にきょうだいが面会する場で，その場に立ち会う看護師が，きょうだいだけでなく，両親の状況をどう捉えながら，双方を支援しようとしているのかに注目する必要があると考え，看護師へのインタビューを中心にデータ収集を進めることとした。また，当初は看護師のみを対象として考えていたが，データ収集をおこなう中で，Child Life Specialist（CLS）といった看護師以外の専門職もきょうだいと両親の支援において重要な役割を担っていることがわかり，また，様々な視点からのデータを得ることで，より詳細に現象を把握できると考え，看護師以外の職種も対象とした。

最終的に，助成期間内に 15 名の医療者（看護師 9 名，CLS 5 名，PICU 専従保育士 1 名）へのインタビューと，2 事例 6 場面の面会場面の観察、3 名の両親へのインタビューを行った。医療者 15 名のインタビューデータと，助成期間内に収集した 6 場面の観察データを分析，統合したうえで，以前に収集した 6 事例 9 場面の観察データも再分析して統合した結果，【きょうだいの居場所をつくる】という概念を中心とした，14 の概念からなる現象が明らかとなった（図２）。

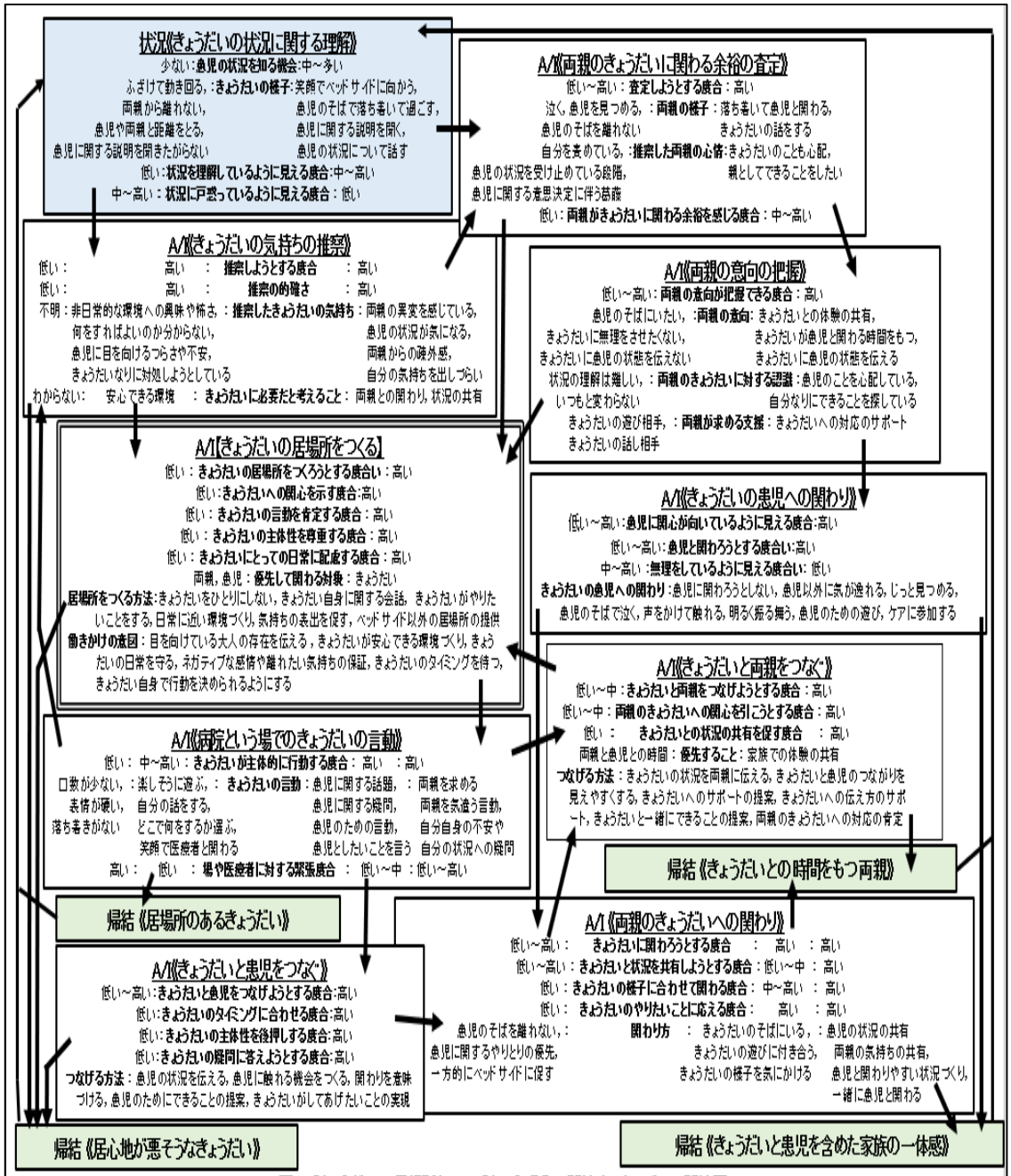

図2.【きょうだいの居場所をつくる】という現象に関連するカテゴリー関連図

本研究結果から，医療者が，《きょうだいの気持ち》だけでなく，《両親のきょうだいに関わる余裕の査定》や《両親の意向の把握》もおこないながら，【きょうだいの居場所をつくり】，《きょうだいの言動》に合わせて《きょうだいと患児をつなぐ》や《きょうだいと両親をつなぐ》といった働きかけをおこなっていることがわかった。医療者の適切な働きかけによって，両親に余裕がない状況であっても，《居場所のあるきょうだい》という状況をつくることができれば，きょうだいは患児の闘病の“場”を共有することができ，そのようなプロセスの中で，両親にきょうだいに関わる余裕が生まれれば，PICU という特殊な場であっても，《きょうだいと患児を含めた家族に一体感》が感じられるような時間をもつことにつながっていた。

子どもが PICU に入院するという，家族にとって重大な出来事の中，きょうだいが家族の一員としてその出来事に参加できることは重要であり，本研究の結果は，きょうだいが PICU に面会に来た場という限られた場面ではあるが，PICU 入院児のきょうだいへのひとつの支援として，具体的な知見を提示できるものであると考え，現在，投稿に向けた準備を進めている。

今後の展望としては，本研究を通して，きょうだいと両親とは相互に作用するものであり，きょうだいへの支援は同時に両親への支援にもつながることを感じている。今までに収集した 9 名の両親へのインタビューデータの分析も踏まえて，今後，両親から見て，きょうだいを面会させ

ることや，PICU の医療者によるきょうだいの支援は，どのような体験として意味づけられているのかについても検討したいと考えている。くわえて，今までの調査では，きょうだい自身を対象としたインタビューなどはおこなってきていない。今後は，きょうだいへのインタビューや，両親への質問紙調査によるきょうだいの実態調査など，きょうだい自身に生じていることをより直接的に捉える研究も必要であると考えている。

＜引用文献＞

① Craft M., Craft J.L, Perceived changes in siblings of hospitalized children: a comparison of sibling and parent reports, Child Health Care, 18(1), 1989, 42-48
② Morrison L, Stress and siblings, Pediatric Nursing, 9(4),1997, 26-27
③ 太田にわ，小児の母親付き添いによる入院が家族に及ぼす影響-家に残された同胞の精神面への影響-，岡山大学医療技術短期大学部紀要，3,1993, 55-61
④ 新家一輝，藤原千恵子，小児の入院と母親の付き添いが同胞に及ぼす影響-同胞の情緒と行動の問題の程度と属性・背景因子との関連性-，小児保健研究，66(4),2007, 561-567
⑤ 小澤美和，泉真由子，森本克，他，小児がん患児のきょうだいにおける心理的問題の検討，日本小児科学会雑誌，111(7),2007, 847-854
⑥ 堂前有香，石川紀子，藤岡寛，他，入院中の子どものきょうだいのストレスの実態と、きょうだい・家族が必要とする支援，日本看護学会論文集：小児看護，41,2011, 184-187
⑦ 石川紀子，西野郁子，堂前有香，他，小児医療専門施設におけるきょうだい支援の現状，小児保健研究，71(2),2012, 289-293
⑧ 小林京子， 法橋尚宏， 入院児の家族の付き添い・面会の現状と看護師が抱く家族ケアに対する困難と課題に関する全国調査，日本小児看護学会誌，22(1),2013, 129-134
⑨ Meyer EC, Kennally KF, Zika-Beres E, et al, Attitudes about sibling visitation in the neonatal intensive care unit, Archives of Pediatrics and Adolescent Med-icine, 150(10),1996, 1021-1026
⑩ Meert KL, Clark J, Eggly S, Family-centered care in the pediatric intensive care unit, Pediatric Clinics of North America, 60(3),2013, 761-772, 2013
⑪ Wranesh BL, The Effect of Sibling Visitation on bacterial colonization rate in neonates, Journal of Obstetric, Gynecologic, and Neonatal Nursing, 11(4),1982, 211-213
⑫ Solheim K, Spellacy C, Sibling visitation: Effects on newborn infection rates, Journal of Obstetric, Gynecologic, and Neonatal Nursing, 17(1),1988, 43-48
⑬ Schwab F, Tolbert B, Bagnato S, et al, Sibling visiting in a neonatal intensive care unit, Pediatrics, 71(5),1983, 835-838
⑭ Oehler JM, Vileisis RA, Effect of early sibling visitation in an intensive care nursery, Journal of Developmental and Behavioral Pediatrics, 11(1),1990, 7-12
⑮ Frazier A, Frazier H, Warren NA, A discussion of family-centered care within the pediatric intensive care unit, Critical care nursing quarterly, 33(1),2010, 82-86
⑯ 西名諒平，戈木クレイグヒル滋子，きょうだいを主役にする-小児集中治療室入院児と面会するきょうだいへの働きかけ-，日本看護科学学会誌，37, 2017, 244-253
⑰ Ress G, Gledhill J, Garralda ME, et al, Psychiatric outcome following paediatric intensive care unit(PICU) admission: a cohort study, Intensive Care Medicine, 30(8), 2004, 1607-1614.
⑱ Colville G, Pierce C, Patterns of post-traumatic stress symptoms in families after paediatric intensive care, Intensive Care Medicine, 38(9), 2012, 1523-1531.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 西名諒平、戈木クレイグヒル滋子	４．巻 37
２．論文標題 きょうだいを主役にする：小児集中治療入院児と面会するきょうだいへの働きかけ	５．発行年 2017年
３．雑誌名 日本看護科学会誌	６．最初と最後の頁 244-253
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5630/jans.37.244	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 西名諒平
２．発表標題 なごやかな家族の時間-早期からきょうだいの面会を重ねて看取りを迎えた1事例に関する検討
３．学会等名 第24回小児集中治療ワークショップ
４．発表年 2016年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考